

第六章 無のリアリティへ向けて

果てしなく渦動する〈私〉の現実の直中で落着はどのように現れているのであろうか。現実から落着への道は、前章で、自由から進んで無に出合った。ここでは、無が対象の空虚から認識の否定へ転換し、〈私〓意志の否定〉が「意志を否定する」から「私〓意志が否定する」へ転換することによって、落着を求める道も、落着が現れる道へ方向転換した。しかも落着の現れは、意志の否定であり、〈私〉の否定である。そうであれば、落着はどのように現れているかという問いは、否定はどのように現れているかという問いになる。それが意志の否定であり、そして意志が見えない現実としてこの現実の連関を形成する表象的感应的意志の生動性である限り、意志の否定もまた意志の作用、〈私〉の生動性のほかにはない。かくして問いは次のようになる。意志の否定はどのように作用しているのであろうか。それは、対象の空虚から方向転換して、リアルに、生動的に、作用しているのであろうか。否定の連関を辿ってみよう。

第一節 無の概念規定

われわれはまず、ショーペンハウアーが哲学の立場から行った認識の否定としての無の概念規定を、客体の空虚ではなく、主体の否定（主体が否定）に留意して、再確認しておく。

「無の概念は本質的に相対的であり、常にただ、それが否定する特定のものに関係づけられてい
る」(SW2484)。

無とは否定することであり、否定されるものに関係づけられているがゆえに相対的である。彼が規定する無は、否定としての無であり、このゆえに相対的無である。ここで留意したいのは、「無の概念が「…」を否定する」、あるいは他の箇所で「無が「…」を否定する」(SW2484)と言われているように、無が否定するものであって、否定されたものが無ではない。たとえば主体S（私）が対象Pを否定する場合、否定するのはSであり、したがってSが無（否定する）であって、その目的語（否定の対象）が無となるのではない。¹⁾先に見たハイデガーの言い回しを使えば、無の本質は無自身が無くなることである。主体（否定するもの）が無である。われわれはこのような否定としての無、あるいは否定する無が作用する連関を簡単に次のように標示できよう。

(1) 否定…S（私）はPを否定する…SはPで無い…Sは無い…Sは無である…主体の無

しかも無が相対的であるとは、存在と無の標示が交換可能であることを意味した。「相対的無は、それが否定するものと常に標示を交換することができるのであり、そして交換した場合、無が否定したものは否定として、そして無それ自身は肯定として考えられることになる」(SW2484)。これに従って右の(1)の標示を交換してみよう。

(2) 否定…PはS(私)を否定する…PはSで無い…Pは無い…Pは無である…主体の無

先の(1)ではSが無(したがってPは相対的に存在)であったのに対して、(2)ではPが無(したがってSは相対的に存在)になり、標示は交換する。

これに対してカントは、対象の無として、欠如的無と否定的無を挙げているが、前章で見たようにシヨープンハウアーからすれば、後者も前者の一つであり、いずれの無も相対的であった。それでは、欠如的無は否定としての無と同じであろうか。相対性という点で同じだとしても、他の点で異なるのではないか。われわれはその違いにこそ注目したい。

まず、欠如的無は、カントにとって、対象の無の一つとして、質のカテゴリーに応じた「概念の空虚な対象(欠如的無)」であり、例として「影」が挙げられていた。⁽²⁾影は、概念があっても認識の対象として何らかのものとして存在するのではなく、光という対象の欠如である。それは存在する対象の欠如という意味での欠如的無である。われわれはカントの例を、否定としての無の規定(1)に当てはめて理解することができよう。そして、シヨープンハウアーの趣旨に応じて、(2)のように標

示を交換してみよう。

(1例) 否定…光は影を否定する…光は影で無い…光は無い…光は無である…主体の無

そして(2)に従って標示を交換してみよう。

(2例) 否定…影は光を否定する…影は光で無い…影は無い…影は無である…主体の無

右に見るように、カントが対象の無(空虚)として挙げた例も、否定としての相対的無の通り、表示が交換可能になる。実際、「影は光で無い」と同時に「光は影で無い」。このようにカントの言う欠如的無も、認識の否定として標示が相対的に交換可能になる。

しかしながら、対象の無としては、影が無であっても、光は無ではない。そうであれば(1)は成り立たないのではないか。光が認識の対象として存在して初めて、影はその欠如(無)として生じるのであって、その逆ではないからである。実際われわれは、光を遮ることによって影を作ることができて、その逆はできないのである。したがってここでは、存在と無の標示は固定する。否定としての無は認識としての判断の標示に現れる否定であるのに対して、対象の無は、何かが対象としてその存在が措定され、前提される限りで語られるのである。

このように見れば、共に相対的ではあっても、否定としての無と対象の無は、標示の交換可能性と

いう点で決定的に異なることがある。標示としては交換可能であつても、対象の無は、そのどちらか一方(2例)であり、他方(1例)はそもそも成り立たないのである。対象の無は標示が固定する。この違いはどうして生じて来るのであろうか。それは、否定として無がほかならぬ認識の否定である点に見出すことができるのではないか。

ショーペンハウアーにとってこれら二つの項(光と影)は、共に主体に対する表象であり、したがってここでは、それが存在するか否かは、主体がそれを表象(認識)するか否かである。ここに、標示の交換可能な否定としての無が生じる。しかしそれにもかかわらず、認識は主体が客体(対象)を表象することによって初めて成り立つがゆえに、対象なしに認識は成り立たず、したがって認識の否定はどうしても対象の無(空虚)として対象化(表象化)され、標示も固定してしまうのではないか。かくしてカントでは、認識されるべき対象が存在するか否かが問題となり、存在と無は相対的であつても標示は自由に交換できず、固定する。光は認識の対象として存在し、無いものではないのである。

これは鏡の比喻によって見ることができたと同様ではないか。目(主体)は目を見ることができないにもかかわらず、鏡を使って、つまり反省という意識の分裂によって、われわれは目(主体)を対象化して見ることに慣れ、これを当たり前のこととして行っているのである。すなわち、目(私)は反省によって対象化され、その限りでその存在が前提され、その標示は固定されているのである。しかし否定としての無から見れば、(1例)の光のように、「目(私)は無である」。存在するのは目が見ているものである。これが(1)の連関の標示である。そうであれば、反省によって

ではなく、したがって意欲を介するのではなく、目が鏡の中の目自身を見入るように、何かを見ると
いう働きの直中で、したがって意志の否定という作用の直中でこそ、「目（見るという働き）は存在
する」と標示の交換ができるのではないか。これが（2）の連関である。

このように見れば、ショーペンハウアーによるカントの批判的受容は、対象の無をふたたびその源
としての否定としての無へ引き戻そうとする試みであったと言えよう。そうであれば、逆に、否定と
しての無から対象の無がどうしても生じざるをえない道筋を連関づけることができなければならぬ
であろう。われわれはそれを以下のようにすることができるとはいえないか。否定としての無の規定
（1）と（2）を出発点にして、それを対象化してみよう。否定としての無が「SはPを否定する」
において「否定するS」であって、「否定されるP」ではなかったのであれば、対象化は、逆に、無
を「否定されるP」として捉えることを意味しよう。（1）（2）は次のようになる。

（1） 否定…S（私）はPを否定する…SによってPは否定される…Pは無い…Pは無である…
対象の無

（2） 否定…PはS（私）を否定する…PによってSは否定される…Sは無い…Sは無である…
対象の無

同じように、影と光の例も対象化してみよう。

(1'例) 否定…光は影を否定する…光によって影は否定される…影は無い…影は無である…対象の無

(2'例) 否定…影は光を否定する…影によって光は否定される…光は無い…光は無である…対象の無

いずれも標示としては交換可能であり、無の相対性を現しているが、対象の無としては(2'例)は成り立たず、標示は(1'例)に固定されるのである。

しかしわれわれはここで奇妙なことに気がつく。否定の無が対象の無へ対象化されると、標示がまさしく逆転するのである。(1'例)では、否定の無はS(したがってPは相対的に存在)であったが、対象の無はP(したがってSは相対的に存在)になっているのである。(1'例)と(1'例)を併記するとそれが明瞭になる。

(1'例) 否定…光は影を否定する…光は影で無い…光は無い…光は無である…主体の無

(1'例) 否定…光は影を否定する…光によって影は否定される…影は無い…影は無である…対象の無

(2例)と(2'例)も同様である。

(2例) 否定…影は光を否定する…影は光で無い…影は無い…影は無である…主体の無

(2'例) 否定…影は光を否定する…影によって光は否定される…光は無い…光は無である…対象の無

(1)の例では、「光の無(影の存在)」が対象化されると「影の無(光の存在)」へ標記が逆転し、(2)の例では、「影の無(光の存在)」が「光の無(影の存在)」へ標記が逆転する。否定の無が対象の無へ対象化されると、無と存在の標記は逆転するのである。これは、文が能動形から受動形に方向転換していることに由来している。したがって〈標記〉が逆転しても文の〈意味〉は同じである。そうであれば、否定としての無の連関に生きる人と、対象の無の連関に生きる人は、〈同じ意味の現実〉に生きながら〈逆転した標示の現実〉に生きていくことになる。

このことは、われわれに重要な点を示唆している。そこにこそ注目したい。すなわち、否定としての無の連関からすれば、否定としての無が対象化されて対象の無が生じてくる右の連関がよく理解でき、また標示が逆転することも理解できるのに対して、対象の無の連関に立つと、否定としての無の連関は理解できないだけでなく、自身の立場の根拠すら不可解になってくるのである。というのは、

対象の無からすれば、標示は固定して(1')のみになり、したがって光と影の例で言えば、影の無が現れる(1例)のみになり、したがってそれ以外に標示が交換された連関が理解できないだけでなく、無(影の無)の原因を理解しようとして連関を遡って否定の無に至っても、そこに見出されるのは逆転した標示(光の無)であり、矛盾に陥るからである。しかも、この逆転が能動形から受動形へ、文の(意味)は変ることなく(標示)が逆転することであれば、否定としての無の連関に生きる人は対象の無の連関に生きる人と(同じ意味)の中で生きながら彼らが矛盾に陥り理解不能に陥っている理由を良く理解できるのである。これに対して、対象の無に生きる人は、矛盾のゆえに、否定としての無の立場を非難する。それがわれわれが前章で日常の立場と名づけた立場からの非難であった。日常の立場の連関を見よう。

第二節 肯定の連関

ショーペンハウアーは無の概念を規定する直前に、みずからの哲学に対する一つの非難を挙げていた。彼はその非難に應えるために、無の適切な理解を提示しようとして概念規定したのである。その非難は次の通りであった。すなわち、意志の否定によって苦悩から救済されると説かれているが、しかしこれによってこの世界は救済どころか「空虚な無へ移行」してしまふように見える(SW2:483)。この非難で言われている「空虚な無」は、前節で見たように、対象の無である。したがって、この世

界はさまざまに存在する対象に満たされた世界であって、それがそっくり無（対象の欠如）へ移行するはずがない、ということがこの非難で主張されている。彼はそれを「一般的」として次のように言う。

「一般的に肯定とみなされ、われわれが存在者と名づけているものは、〔…〕表象の世界である」
 (SW2,485)。

表象の世界は主体と客体によって形成され、客体は主体の形式としての時間空間と根拠律によって規定された存在者として表象の世界を満たしている。表象の世界は、何らかのものを存在するものとして表象化（対象化、客体化）することによって成り立つ。

このように表象界を存在として標示する立場が、これまで見てきた日常の立場である。ハイデガーが日常性の分析で取り出したように、自己の死もまた空虚な無として恐れられたり、空虚であるがゆえに先延ばしされたりするのも、この日常の立場である。カントもまた、この立場の一人となる。存在を前提して初めてその欠如としての無が語られるのである。ここでは、存在と無の標示は交換されず、固定されるのである。ここから非難が生じたのである。意志と表象、あるいは私と世界の連関で標示してみよう。現実はこの相互連関として〈私〉の直中で交差し、〈私〉を形成しながら〈私〉に現れて来るのである。まずもとなる意志（私）の否定の作用の連関を辿ってみよう。

(I) 否定…意志(私)は世界を否定する…意志は世界で無い…意志は無い…意志は無である…
主体の無

これが日常の連関では対象化される。

(I') 否定…意志(私)は世界を否定する…意志によって世界は否定される…世界は無い…対象
の無

かくして、日常の立場は意志の否定を世界の無として逆転して理解し、恐れ、また救済どころではないと非難するのである。このゆえにまた、日常の立場は世界の存在を主張するために、これとは逆に、意志(私)を肯定し、自身のためにを連関の交差の要かなめにして世界との連関を形成し固定しようとする意志するのである。

そうであれば、この立場からの非難は不当な非難ではなからう。そこには日常の生の存在の肯定が表明されているからある。しかもこの肯定は〈私〉という主体を存在として標示し肯定することである。そのためにはまさしく〈内なる鏡〉を使って主体を客体化しなければならぬ。日常の立場は、反省によって主体を客体化し、主体を含めたこの世界を存在の世界として標示するのである。それゆえ主体としての〈私||意志〉の否定は世界の無へ標示が逆転してしまうのである。それはちょうど鏡の反射によって反転像が映し出されるのと同様である。

これは鏡のこちら側とあちら側からなる意志と表象としての世界にあつては必定の対象化の帰結である。このゆえに彼は非難を退けることなく次のように言う。「この非難は事柄の本質を突いており、非難を取り除くことはまったく不可能である」(SW2483)。こゝで言われる「事柄の本質」こそ、日常の世界を成り立たせている対象化(表象化、客体化)であり、しかも対象化は、表象界の本質である意志そのものの「意志の客体化」(SW2485)に由来しているのである。

第三節 否定の連関

これに対してショーペンハウアーが「逆転した立場」(SW2485)と名づける立場は、〈私〉と世界そして否定としての無を反省によって対象化しない立場になろう。しかも、〈私〉もまた生への意志であるならば、それは〈私〉が〈私〉自身を否定する立場であるとも言えよう。ここでは、日常の連関が無を対象の無として表象して存在と無の標示を固定するのに対して、無を認識の否定として捉えることによって日常の連関の標示も含めて標示の交換を自由に行うのである。存在と無の標示に着眼すれば以下になろう。

(I) 否定・意志(無)は表象(存在)を否定する・意志は表象で無い・意志は無い、表象は存在する

これが意志の否定の作用の連関である。目が何かを見ているとき、存在するのは見られているもの以外にはないのである。目は自身を見無いからである。そして標示を交換するならば次のようになる。

(Ⅱ) 否定・表象(無)は意志(存在)を否定する…表象は意志で無い…表象は無い、意志は存在する

すなわち、目が何かを見ているとき、存在するのは目が見ているという働き以外にはないのである。何かは何も見無いからである。

では標示の交換によって何がどのように変わったのであろうか。「表象は無い」と言われるのであれば、この世界は消滅するであろうか。しかしこの問いは、否定としての無を対象の無に対象化したときに生じるものであった。否定としての無の連関に在る限り、この問いは、そもそも問いとして生じえないのである。そうであれば、(Ⅰ)と(Ⅱ)の標示の交換は、認識の観点から理解するのが適切な理解になろう。ショーペンハウアーはそれを、まさしく認識の観点から、「等しいものは等しいものによってのみ認識される」という「エンペドクレスの古き命題」に即して述べる。

(Ⅰ理解)「意志の無はわれわれによって否定的にしか認識され標示されない。なぜなら、ここでは、等しいものは等しいものによってのみ認識されるというエンペドクレスの古き命題がわ

れわれからすべての認識を奪い取るからである」(SW2485)。

これに対して標示の交換後は次のように理解される。

(Ⅱ理解) 「ちようどこれとは逆に、われわれのすべての現実認識の可能性は、すなわち表象としての世界は、言い換えれば意志の客体は、けっきょく、まさしくこの命題に基づいている。なぜなら、世界は意志の自己認識だからである」(SW2485)。

さて、標示を交換する前の理解(Ⅰ理解)に基づけば、(Ⅰ)の標示は「意志が無、表象が存在」であり、意志(無)は表象(存在)を認識できないことになる。エンペドクレスの命題に従えば、等しいもののみが認識されるからである。これに対して交換後の理解(Ⅱ理解)は、現実認識が可能になり、しかもそれは意志の自己認識としてである、と云うのである。われわれはこれをどのように理解したらよいのであろうか。

まず、(Ⅱ理解)で注意すべきことがある。ここでは「[:::]」表象としての世界は、言い換えれば意志の客体は「[:::]」というように、表象の世界がとりたてて意志の客体と言い換えられ、しかもこの「客体は〔エンペドクレスの〕命題に基づいている」と言われている。これこそ(Ⅰ)から(Ⅱ)への標示の交換の結果ではないか。すなわち、Ⅱでは、標示が交換して、「表象は無い、意志は存在する」となるのは、表象が意志の客体であることを意味している。それゆえ、意志の認識は、Ⅰ「意

志は表象を認識でき、無い」からⅡ「表象（意志）は意志を認識できる」へ標示交換されるのである。すなわち、意志の否定は、意志の自己認識を意味しているのである。

このように表象が無となつて意志が存在するのであれば、存在するのは、表象として客体化している意志、端的に言えば、表象としての意志であろう。われわれはこれを肯定的に次のように表すことができるかもしれない。

(Ⅲ) 意志は表象である、表象は意志である

これは、エンペドクレスの命題に適つた意志の自己認識を肯定的に表現したものである。まさしく「意志と表象としての世界」の認識である。(Ⅰ)と(Ⅱ)の標示交換が一枚の紙の表と裏という標示の交換に喩られるなら、(Ⅲ)は表裏からなる一枚の紙になろう。(表象としての意志)はこの現実をあたかも表裏からなる一枚の紙のごとくに意志自身の「否定・廃棄・方向転換」として「自己認識」(SW2,485)する。そこで自己認識されたこの現実が〈意志と表象としての世界〉にほかならない。かくして肯定的認識Ⅲ)において意志の自己否定としての意志の自己認識が実現しているのである。意志(我)は表象(汝)で在る、と。この(Ⅲ)が聖人の境域であり、〈私〉が落着する処にほかならない。それはちやうど、目(意志)が鏡に映つた自身の目(表象)の中心を見入ると同時に、その目(表象)が逆に目(意志)を見入っている境域であろう。ここでは〈私〉を内的に対象化する内なる鏡も意欲も介在して無いのである。

第四節 現実と落着

しかしながら、われわれが肯定的に表現した「(Ⅲ) 意志は表象である、表象は意志である」は、この表象界にあつて矛盾律を犯している。(Ⅰ)「意志は表象で無い」からであり、(Ⅱ)「表象は意志で無い」からである。しかも存在と無の標示からすれば、(Ⅰ)から(Ⅱ)への標示交換は「意志は無い」から「表象は無い」へ交換されているがゆえに、(Ⅲ)においては意志と表象が共に無の標示を受けることになる。われわれはそれを次のように連関づけることができよう。

(Ⅲ) 否定・意志は表象で無い・表象は意志で無い・意志も表象も無い・絶対的無

しかし、無は標示として存在と相対的であるかぎり、ここで標示される無は相対的無と呼べない。それは、前章で触れたように、いかなる観点からも無である絶対的無と言うべきであろう。ショーペンハウアーは慎重に仮定法を使って次のように語る。

「もし意志が端的に絶対的に物自体であるとすれば、空虚な無も絶対的無であろう。それが現象の世界で明確に相対的無としてしか生じない代わりに」(SW2222)。

彼がここで仮定法で語っていることは、ここでの無が、たとえば二つの否定(Ⅰ・Ⅱ)を止揚した

総合であり、そこで表示される無は相対性を絶した絶対的無である、といった思弁に走ることを禁じ、そうした「概念の弁証法的自己運動」を「思想の自動機械」(SW5,177)として排斥していることを物語っている。^③しかしまた、(Ⅲ)のみならず(Ⅰ)(Ⅱ)も、そして(Ⅰ)における否定としての無の連関さえ、対象の無による日常の立場からは非難されよう。日常の立場は意志の否定を非難する。これに対してショーペンハウアーは、逆転した立場として否定的に(Ⅰ)と(Ⅱ)を語り、しかし肯定的に(Ⅲ)は語らないのである。すなわち、矛盾律を犯してはならない哲学の立場にとって聖人の境域は否定的にしか語ることができないのである。

ここでわれわれにとって重要なのは、(Ⅲ)における聖人の境域として「落着」は、前章で見たように絵画を通して比喩的に語ることができるといふ点である。そうであればわれわれは、落着を私の求める対象ではなく、方向転換して、〈私〉がこの渦動する現実の直中で落着する道筋を、〈私の否定の連関〉の道筋として、意志の否定を原理にして語ることもできよう。それに従えば、われわれもまた(Ⅲ)の標示を次のように交換してわれわれの日常の世界へ戻つてもよからう。すなわち、意志には〈私〉を、表象には世界を入れてみよう(Ⅲ₁)。そして、それを逆転してみよう(Ⅲ₂)。

(Ⅲ₁) 否定…私は世界で無い…世界は私で無い…私は無い、世界は無い…絶対的無

(Ⅲ₂) 絶対的無…私は無い、世界は無い…私は世界で在る…世界は私で在る…私は在る、世界は在る…日常の世界

Ⅲ₁からⅢ₂への逆転もまた、否定としての無の標示交換である。存在と無は認識の標示のほかにはないのである。このように聖人の境地において完成する〈私Ⅱ意志〉の自己否定は、〈私Ⅱ意志〉の自己認識として、この現実を形成している。落着の境域もまた、絶対的無としてこの現実の直中に存在するのである。そうであれば〈私〉は次のように言ってもよいであろう。〈私の否定〉は「私は無い、世界は在る」であり、しかもこれは〈私〉の表象的感应的な意志の作用として生動的にこの日常の現実の直中で現れているのである。すなわち「私は在る、世界は在る」と。これが〈私の現実〉の落ち着き処にほかならない。

しかし、日常の連関に固着するとき、否定の無そしてその連関が理解できないように、落着の境域も理解でない。それにもかかわらず、この現実の直中に落着は現れているのである。「絶対的」が付される境地は、(Ⅰ)(Ⅱ)における標示の相対性という制約からも自由になって、(Ⅰ)(Ⅱ)に(Ⅲ)をも加えて、世界を「在る」とも「無い」とも自在に標示しうるのである。それが(Ⅲ₁・Ⅲ₂)であり、(Ⅲ₁・Ⅲ₂)がこの現実である。そしてそこを貫いているのが〈私Ⅱ意志の否定〉という作用にほかならない。それはちょうど、鏡の比喩で言われたように、内なる鏡を介することなく視線と光線が一つになった作用に喩えられよう。

この現実はさまざまなる人・物・出来事などから形成されている。〈私〉は、そして〈私たち〉は、それらが相互に作用する交差点として形成され、〈私〉そして〈私たち〉の中でそれらは綴れ織りの糸目のように複雑に結びつきながら一つの図柄を浮き上がらせる。その現れが現実である。しかしそれは、内なる鏡を介して対象的に表象される限り、空虚になり、そのリアリティは消尽し、どこまで

も現れて来ない。どこで始まり、どこで終わるのか、その無となる処は謎のままベールに包まれ、われわれは現実に翻弄され、先へ先へ駆り立てられ続ける。しかしその直中にあっても、落着は見えない現実としてこの現実を形成している。それが〈私〉の現実の連関に現れているかは、この現実の連関が交差する〈私〉の直中で、〈私の否定〉としての無が、空虚ではなく、リアルに息づいているかに掛っているのである。

注

- (1) このような無 (Nichts) の規定は、中高ドイツ語からの成り立ち「あるもの (Etwas) を否定すること」(n-icht-s) に即してゐる。次を参照。Welte, 1975, S.26.
- (2) Kant, Kdr.V, B346ff.
- (3) 現実の把握という視点から彼の意志的把握をヘーゲルの汎論理主義的把握への批判として解釈するものとして以下を参照。Schmidt, 1988, insb. S.58ff.

おわりに

前著『実在と現実 リアリテイの消尽点へ向けて』の出版から九年の歳月が流れた。前著が実在から現実を目指したのに次いで、本書は現実から落着（おちつき、ラクチャク）を目指している。もちろん落着は、日々駆り立てられ、どこへ行くとも知れない現実の中にリアルに現れていないように見える。それはちようど、この世界が存在する世界とするなら、その限界を区切っている無が現れていないのと同様であろう。無がリアルに現れているとき、その当処がこの現実の落ち着き先なのかもしれない。本書はその地点を現実の連関が交差する（私）の直中に見定めて、デイルタイ、シヨーペンハウアー、ハイデガー、エックハルトなどに手掛りを得ながら進んできた。しかし首尾よく進めたかどうか、前著同様に甚だ心許ない。ご批判頂ければ幸いである。

本書は折に触れて書き散らかした論文を本書の題名と副題名に従って書き改めたものである。そのさい、学会誌などに掲載の論文では各哲学者のテクニカルチームに原語を添えているが、本書に収めるさいに原語はほほすべて省いている。また内容的に論点や解釈を改めている箇所もあり、全体として原型を留めていない論文もあるが、論文掲載の各機関に謝意を表したい。

第二章 現実の形成

・「斉一性から見る構造と構造連関の意味形成——ディルタイ全集第二一・二二巻を中心に」『ディルタイ研究』第二〇号、日本ディルタイ協会、二〇〇九年一月三〇日、二二九—一五六頁。

・「ディルタイとヒューム——〈連関の経験〉と〈観念の連合〉」『ディルタイ研究』第二二号、日本ディルタイ協会、二〇一一年一月三〇日、八〇—九六頁。

・「ディルタイとJ. S. ミル——〈類比による連関〉と〈帰納による普遍〉」『ディルタイ研究』第二二号、日本ディルタイ協会、二〇一〇年一月三〇日、五四—六七頁。

第二章 現実の理解

・「歴史的社会的現実の解釈学——類比を視点にして」『ディルタイ研究』第二三号、日本ディルタイ協会、二〇一二年一月三〇日、一四—三七頁。

・「理解について」『ディルタイ研究』第一六号、日本ディルタイ協会、二〇〇五年十一月一日、七二—一〇一頁。

第三章 見えない現実

・「追形成・類比・追体験——ディルタイの想像力論に寄せて（上）・（下）」『文学論集』第六三巻第一・二号、関西大学文学部紀要、二〇一三年七月・九月、一九—三九—一—三二頁。

・「意志について——ショーペンハウアーとニーチェ」『文学論集』第五七巻第四号、関西大学文学部紀要、二〇〇八年三月一日、一—三七頁。

第四章 鏡を介して〈見る／見える〉現実

- ・「鏡の比喩——鏡を介して〈見える／見る〉世界」『理想』六八七号、理想社、二〇一一年九月三〇日、八七—九九頁。

- ・「意識の分裂と意志の現示——シヨールペンハウアー」『シヨールペンハウアー研究』第一三三号、日本シヨールペンハウアー協会、二〇〇八年六月一日、一三五—一五六頁。

第五章 落着

- ・「落着の問題圏——自由を巡って」『東西学術研究所紀要』第三四輯、関西大学東西学術研究所、二〇〇一年三月、五七—八一頁。

- ・「落着の問題圏——無を巡って（一）」『東西学術研究所紀要』第三六輯、関西大学東西学術研究所、二〇〇三年三月、四九—七〇頁。

第六章 無のリアリティへ向けて

- ・「無の哲学」『シヨールペンハウアー読本』齋藤智志ほか編、法政大学出版局、二〇〇七年三月七日、二三八—二五四頁。

これらの論文から本書に至る研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（二〇〇八一—一〇年、二〇一〇—一三年）、関西大学平成二四年度秋学期国内研修員研修費などにより行われ、また本書は「関西大学研究成果出版補助金規程」により補助金の交付を受けて出版に至った。この間、関西大学研究推進部研究支援課および出版部出版課の皆様にご多々お世話になった。記して謝意を表したい。

本書を上梓するにあたり、エックハルトへ導いて頂いた関西大学名誉教授・川崎幸夫先生、ハイデガーとショーペンハウアーへ導いて頂いた大阪大学名誉教授・茅野良男先生、そしてデイルタイへ導いて頂いた大阪大学名誉教授・故森田孝先生に、また議論の場を開いて頂いた日本ショーペンハウアー協会、日本デイルタイ協会、デイルタイ・テキスト研究会の諸先生に、心より感謝する次第である。

二〇一四年二月

著者